令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会
第3回 権利擁護専門部会 要点録

日時：令和7年2月3日(月)10時～11時45分

会場：文京区民センター2階 2-A 会議室

出席者：

協議会会長

東洋大学 福祉社会デザイン学部 教授 高山 直樹

委員

文京区障害者就労支援センター 主任 皆川 譲

文京地域生活支援センターあかり 施設長 清水 健太

弁護士 坂井 崇徳

司法書士 箱石 まみ

社会福祉士 新堀 季之

文京社会福祉士会 保坂 勇人

文京区民生委員・児童委員協議会 本富士地区副会長 今本 美和子

知的障害者相談員 山口 恵子

当事者委員 久米 佳江

文京区社会福祉協議会 権利擁護センター係長 平石 進

区委員

福祉政策課 地域福祉係長 宮原 駿一

障害福祉課 身体障害者支援係長 福田 洋司

障害福祉課 知的障害者支援係長 須田 浩史

予防対策課 保健指導係長 柳瀬 裕貴

欠席者：

親会委員 文京槐の会 は〜と・ピア2 施設長 松下 功一

文京区障害者基幹相談支援センター所長 美濃口 和之

当事者委員 杉浦 幸介

区委員 予防対策課 精神保健係長 佐藤 祐司

事務局

文京区社会福祉協議会 事務局次長 石樵 さゆり

文京区社会福祉協議会 権利擁護センター 伊藤 真由子

文京区社会福祉協議会 権利擁護センター 古賀 四季穂

1. 開会

松下部会長が欠席のため、本日は新堀副会長に進行をお願いしたい。

2. 議題(1) 「生活の変化」から考える成年後見制度利用ガイド(成果物案)について

資料第2号・第3号に基づき説明。2月17日開催予定の「令和6年度第2回障害者地域自立支援協議会(全体会)」において、この成果物をお示しする予定であるため、どの部分をどのように変更するかなど具体的に確認していきたい。また、出来上がったものをどのように活用していくのかについてもご意見をいただきたい。

【意見交換】

- 見やすい表にまとまって良い。支援者が相談を受けて支援していく中で気がつくことが最初であり、問題をどうするかでライフイベントで位置を確認する流れになると思うが、もう少し流れが分かりやすいと良いと思う。使い方を説明する冊子が入っているとわかりやすい。制度導入のタイミングも本来であれば中心に書きたい内容。片方にだけ矢印があるのは何か意味があるのか。
- 左側は卒業や親亡きあと等のタイミングを記載している。右側は全体にかかっているため、矢印がない。記載の仕方については工夫したいと思う。上の部分については、「表に照らし合わせて考えてみてください」等という案内があるとよいか。
- スタートが分かるようにすればいいと思う。検討していただきたい。
- 事前打ち合わせの時点でも情報量が多いという意見は出ていた。使い方としては、これ単体ではなく表紙等をつけ、リード文の中で誰にどのような時に使ってもらいたいかなどを記載すると思う。実際の活用についてはもう少し工夫していきたい。権利擁護に詳しくない人がこれを見て相談の時期などに気づいてもらうことが主たる目的。情報量が多くなりすぎないようにポイントが理解してもらえることを願って作ったものである。
- ライフステージとライフイベントがあるが、「ライフ」という考え方をどのようにもつか。後見は補完的支援であるため、特に障害者支援においてはサービス等利用計画が中心となる。障害児支援利用計画とどうつながり、連動してアセスメントできる体制があるかの方が重要。後見制度は意思決定支援のひとつの重要な要素だが、後見人だけでなくチームでやっていくものである。子どもの時から療育、教育、福祉と切れ目ない子ども時代の意思形成についてアセスメントをとっていかなければいけない。意思形成においては家族の関係性なども影響を受けている。この表ではライフステージもライフイベントも大人から始まっているが、それよりも前のところが大切。その部分が見えるといいと思う。
- 子どもの時からどのように移ってきたか連動することが必要。障害制度から介護保険の移行期においても、切り替わる時には生活の中身がかなり変わるため、障害と高齢の支援者で取り組んでいるところ。
- 表を見て全体的に情報量が多い印象を受ける。コラムの制度については知的障害の「害」は平仮名でいいと感じた。また、未成年期の支援が支援者側も意識が希薄に感じるため、児童相談所や子ども家庭支援センターとも然るべき連携を図るべき。未成年後見については、児童の支援機関においてもそれほど実績も少ない印象があり、未成年後見の周知もポイントだと思う。法律で年齢により対象が分けられているため、移行期の円滑な橋渡しの役割もあることの周知もひとつの課題であると感じた。
- この表は支援者だけでなく家族や本人への説明の時にも活用できると感じた。コラムに記載のケース

は後見人が選任されて整ったケースではあるが、実際は後見人が入っても本人の意思を尊重していると時間がかかったり、すぐには解決しないことが多いため、後見人がついたからといってうまく改善するわけではないということは入れたいと思った。

●支援者向けというタイトルの中で民生委員は支援者なのか、家族の側で寄り添う立場なのか考えた。直接個人と関わっていける方が支援者とする、私たちの役割は繋ぐことだと思っている。相談者の年齢の幅が広く、私たちがこの表を使って話す時にどこを指しているのか、情報量という点でポイントが示しにくい。内容は必要なことばかりであるため、どこを除くかは判断が難しい。

●これだけで完結するとなると相談窓口のページもなくてはいけない。そうしたものにこれがついてると完璧になるのではないかと思う。認知症ケアパスのような感じで使えると良いが、取り急ぎは連絡先ということではなく、冊子としての案内となる。

●支援者と親の立場から見た感じとしては、わかりやすくよかった。ライフステージやライフイベントの観点で考えることはなかなかないため、それを示す意味では本人や家族に見せても使えると感じた。コラムも具体的な相談のタイミングがわかりやすくよかった。重複するような障害がある方もいるため、限定しないで様々な観点で見られることを示せるといいと思う。

●支援される側の立場からはよくわからないことが多いと感じた。

●これを利用者や家族向けにするともう少し説明や工夫が必要。

●ライフイベントの「生活介護」の記載場所について、生活介護は福祉サービスになるため、3つ目のところに自立訓練や生活介護として入れた方がいいと思う。表紙を作ったりコラムを後ろに回すことでライフイベントやライフステージが見やすくなると思う。支援の流れを知っている人が使うのであればこれでいいが、後見につながることをイメージしやすくするために活用するのであればもう少し制度自体の説明を入れた方がいいと思う。あるいは後見制度のパンフレットに挟むなど。また、「支援者向け」という表現よりも「サポーター向け」という表記の方がより手軽に使いそう。多世代にまたがって制度の注釈を入れると果てしないが、生活福祉課でミドルエイジライフハンドブックを作成しており、そうしたものを参考にしてもいいと思った。

●「生活介護」は就労支援、就労継続支援のあとにいた方がいいということか。

●就労継続支援だと福祉サービスの中に入ってくるためイメージしやすいと感じた。

●仕事欄の就職に「自立訓練」が入ってもいいと思った。就労継続支援を利用していた方で、親の介護をするために安定した利用ができなくなったケースがあり、最終的には利用を一旦辞めることになったが、介護だけにならないように自立訓練の話もしている。支援者向けとあるが、利用者にもこれを見せながら説明できると思った。今回こうした成果物を実際に自分がどう活用するかがとてもイメージできた。企業にも説明できるシートになっていると感じた。

●重層やヤングケアラーの会議に出てワークをすると、自分が知りえる範囲の情報が少ないことを実感する。重層などでいろんな人の手を借りることも大事というところも観点として入れてもらえるといいと感じた。

●支援者含め当事者、家族、それぞれのレベルに応じていろんな層に意思決定支援について声掛けをしていかななくてはいけないと改めて感じた。各専門機関でパンフレットを出している為、いろんなターゲット層に目的を焦点化し、これをベースに形を変えながら周知できると効果的だと思った。

●後見制度の導入については、金銭の問題や家族の思いなどもあり、なかなか進まないと感じることが

ある。家族の思いも尊重する必要があるため、チームが継続的に意思決定に向けての過程を記録に取っていくことが併せて必要だと感じた。コラムに関して、相談をしたきっかけのエピソードや後見制度利用後の展開、注意点などがあるとイメージしやすいと思った。

●前回資料より確実に見やすくなった。情報量が多いのは感じるが、必要なことでもあるため、番号を振るなど、流れがもう少しはっきり見える構成になるといい。また、資料の中で完結するように連絡先やQRコードを張り付けるといい。

●後見制度の説明をする際に、ライフステージやライフイベントの流れが紙になっているものはなく、口頭で伝えている。こういったものを使用することで、どれくらい相手にわかりやすいかを確認しながらバージョンアップしていけると良い。支援者向けとして作成するが、一般の方にも広く使っていただいてもいいと思っている。

●内容や使い方について意見を頂いたため、対象を各分野向けにしていくことも今後検討していきたい。

●親亡きあとになってから後見を開始しても遅すぎる。家族支援でもあるため、家族の状況をどうアセスメントしているか。もっと早い時期に介入しておけばということもあるため、包括や相談支援事業所がもっと連携していかなくてはいけない。この表はベースになるが、これがあるだけでは各機関は繋がらないので、まずは権利擁護センターがこれを使い、ブラッシュアップしていく中で必要な情報を取捨選択していくと良い。また、各機関のものと連動していくように、各部会でフィードバックをもらえるようにしてもいいと思う。

●いただいた意見等を2月17日の全体会にて報告したい。

3. 議題(2) 令和6年度第2回障害者地域自立支援協議会(全体会)について

資料第4号・第5号に基づき説明。

(議題2については質問なし。)

●本部会は本日で最後になるため、各委員より一言ずついただきたい。

●知らないこともたくさんあり、弁護士としてどう関わっていけるか考えさせられる協議会だった。後見人は受任しているが、自分がどこにいるかわからなくなることもあり、後見を受ける側からしてもそうだと思う。どこに相談すればいいかがわかると安心につながるため、情報発信していければいいと思う。

●後見制度の利用促進をしていると活用に目が向きがちだが後見制度だけが本人のためになるわけではないと改めて確認できた。また、障害者のグループホームが区内に少ないという現状、課題についても勉強になった。

●気づきや勉強になることが多かった。後見人をしており、事後的に支援者が関わることが多いが、予防的観点で関わるのが重要であると分かった。様々な選択肢、必要な情報の支援があるため、どこに相談したらいいかわからない時に一元的な窓口が必要であると感じた。

●意思決定支援がわからない状態で参加したが、最も重要と感じ、今後も見守りの中で大切にしていきたい。

●地域福祉推進協議会の委員もしており、いろんな委員会に出ることで全体が繋がっていることがよう

やくわかってきた。印象的だったのは子ども専門部会で学校の先生と懇談した際、先生方も先行きが見えない中で教えていくことに不安を感じていたり、繋がることの重要性を感じたこと。

●全然理解ができなくて迷惑をかけてしまい、もう少し勉強できるようになりたいと思った。

●一連の流れをどこで見ていくかは支援者が把握してはいけない。権利擁護専門部会員だけではなく自立支援協議会の委員でもそうした認識を持って取り組んで行けると良い。

●事例検討の時にケースを出させていただいた方が当時より少し前進しており、ここで話ししたこと良かったのかなと思う。定年後の生活について企業側も心配をしているケースもあるが、当人や家族は本人たちなりの意思決定で生活をしている。いろんな意思決定があり難しいと感じる。

●自分の知識が少ない、視野が狭いと痛感するところ。いろんな立場の方の専門的見地で話を伺い視野が広がる。今後もこうした会議で知り合った方々と実際の支援に力を入れて取り組んでいければと思う。

●後見をひとつの手段として地域にどう普及していくか考えながら参加していた。支援者への意識づけが重要だと思った。ライフステージやライフイベントが意思決定について考えるきっかけになればと思う。定期的なモニタリングを通して考える機会があると、変わることもあるため、1年に1回は意思決定についての見直しを周知していくと広まっていくと感じた。

●他の方の意思決定をすることの難しさを改めて感じた。日々知的障害の方の支援をする中で本人や家族の幸せを考えながら支援しているが、自分の価値観があり正解がわからなくなることもある。こうした部会で意見を頂きながら少しでもより良い支援に繋がれば良いと思う。

●部会の中で様々な立場の方の意見やケースに触れることができ、知識や視野の広がりを感じた。

●権利擁護センターでは、相談に来るときには既に困っている方が多く、こうして先を見て考えられるものをどんどん出していきたいと思っている。今後この表を活用していきたい。

また、本日欠席の委員から、「長きにわたりいろいろと教えて頂きありがとうございました」と伝言を預かった。

●権利擁護の部会を作った時の意義としては、包括的、抽象的な概念である権利擁護の考え方や価値の串を作っていくこと。縦割りにならないようにやってきた。できたものをどうブラッシュアップし他の部会に連動していいものをつくっていくかが重要である。

日本の福祉の良くない点は、縦割りになっているところ。場面場面で必要な時に、先に制度があり、そこに当てはめていくような形の事後的権利擁護になってしまっている。事前的なところのチームを作っておけるとよい。権利擁護を推進できる人は身近な人であるが、権利擁護者になれる人は簡単に権利侵害者にもなりうる。それは支援者も同様であり、ここを自己覚知できているかどうか。こうした問題にどう切り込んでいくかもあると思う。

4. 閉会